

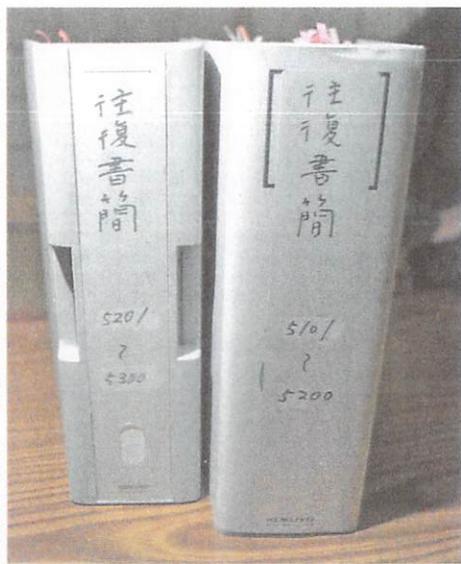


全国から月に60通

日本の自殺者数は昨年、15年ぶりに3万人を下回ったが、依然高い数字が続く。さまざまな団体が電話相談などに取り組む中、「自死・自殺に向き合う僧侶の会」には月平均60通の手紙が全国から届く。書簡のやりとりを重ねる人も多く、2007年の設立から総数は5千通を超えた。

事務局担当の前田有全住職が手紙をデータ化し、パスワード付きの電子メールとしてメンバーに送る。1人が返信を担当し手紙を書くが、3人が一組になって文案を検討した上、担当の僧侶が清書して出す仕組みだ。

「生きたいと思うからこそ書く。だから『生きてほしい』。一人で悩まないで』との思いを込めて手書きで返信しています。僧侶から届いた手紙を持ち歩く人も。寄せられた書簡は定期的におたき上げしている。受付は、郵便番号108-0073、東京都港区三田4-8-20、往復書簡事務局。



相談者から寄せられた往復書簡のファイル。古いものは定期的におたき上げしている＝東京都港区

「頭から死が離れない」。手紙の明読が終わり、重い沈黙が訪れた。「意見をどうした」。よく通る太い声が響く。長い机を囲む約10人の男女が同じ方向に目を向けている。視線の先にあるのは映写された手紙。吉田健一（@思も乱れた文字列を」と見詰めた。東京・築地本願寺の一室で開かれた超宗派の有志による「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の会合。全国から寄せられる自殺に関する相談に、僧侶が返信する往復書簡の活動を続けている。

事でない、本当に腹から出てきた相談者へのメッセージが込められている」と話す。「自分がもたらした温かい手紙。そう感想を

「遺族はひとへくり」にできない」と吉田。夫が自殺した場合、「なぜ気がなかつたか」と妻は親族から責められるケースがある。「鮮のむしろです。子どもたちも母親を気遣い、悲嘆を表現できずに我慢してしま

手書きが伝える温かさを

この日は受け取った手紙についてみんなで考え、返信内容の議論も行った。ただ、プライベートには細心の注意を払い、検討の場でも個人が特定される情報を出さない。

一般的な社会問題が『あなた』と『私』の関係になったんです」

述べるのは浄土宗僧侶の小川有閑(きん)。相談者と対面するのではなく、縁側に2人で座って庭を見ながら「世の中、生きにくいよね」と話す感覚がある、と吉田は小川に語った。

格を取得。ただ、檀家(だんか)は少なく、他の仕事をしないと生活できない。選んだのは葬儀社勤めた。「葬式について知ろうと思

悲嘆を表現できない「自死遺族」への対応は大きな柱だ。遺族同士の分かち合いの会や「自死者追悼法要」も営んでいる。「子どもを亡くした人に『よく頑張っているねえ、強いねえ』という人がいるが、働いて苦しさを紛らそうとしているのに、と遺族は口を閉ざしてしま



「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の会合で映写された手紙を見る吉田健一(右端)＝東京・築地本願寺

「こんなときに僧侶はよ／＼と公教では天国とは言わない」と否定から入る。そんな話は本質ではない。吉田は語気を強めた。「まず受け止めてほしいはず。その人の持っている死生観に寄り添えば、きつと教義とも共有できる『物語』がある。そのように努めるのが宗教家の役割」。10年近く葬儀社で働いた。そこで知った多くの出会いや事実が、僧侶として衣を着る覚悟を養った。

「遺族はひとへくり」にできない」と吉田。夫が自殺した場合、「なぜ気がなかつたか」と妻は親族から責められるケースがある。「鮮のむしろです。子どもたちも母親を気遣い、悲嘆を表現できずに我慢してしま